



第 45 号
 月 1 回 発 行
 ひの心を継ぐ会
 〒799-1336
 住所:愛媛県西条市
 上市甲 720-1
 TEL:080-2986-0856

綱 領

- 一 私達は明德を明らかにします
- 一 私達は国家の鎮護となります
- 一 私達は 大和世界を建設します

神道(十三)(大和世界の建設)

古事記

神秘的 方法(1)

竹葉 秀雄

さらにまたプラトンは感覚と理性とをきびしく区別する立場から、理性を有する部分と非理性的部分とに大別したり、あるいは善霊と悪霊とに分けたりした。同一の靈魂の部分(または作用)として統一的に見ようとした彼の意図にもかかわらず、その二分法は後世に靈肉二元觀を伝え、またその三分法は後世の心理学や医学に悪い影響を与えたとされている。

彼は三部分のおのおの分を果たすとき、理性は知恵、氣概的部分は勇氣、欲情的部分の節制の徳で、これら各部分がその分を守って他を侵さず調和を保つとき、靈魂は正義の徳にあるとした。要するに理性がその真理認識によって命令し、他の部分のこれにすなおに服従するとき靈魂全体はよろしきをうるものとされた。

彼の国家論(レスブリカ)に見える理想国家の説もこの靈魂三分説を基礎とするもので、この国家は、小さな都市国家で、統治者階級と守護者階級と庶民階級とからなっている。この国家では、イデヤ界の真觀を樂しむ哲学者たちが順番に政界に下つてその統治者の任につき、感覚にとられた國民を解放し轉向させて思考の世界に導き上げるために、守護者たちを教育し、彼らに政治方針を指令する。守護者たちは、統治者(哲学者)の命令を正しく理解しこれを忠実に実行する国家の公僕として、その勇氣の徳を發揮し、内外の敵と勇敢に戦い、厳正に行政司法の局にあたる。そのためにはなんらの私をも(妻子の占有)許されず、すべて国家の夫とし妻とし子として共同の生活を営む。庶民階級は、全階級のためにその物質的生活の

資を生産し供給する農工商の業者からなり、その徳は物欲を節して上の支配階級に奉仕するにある。しかし生産活動をはげますためには彼らには私有が認められた。彼の「国家編」の対話では奴隸階級のことには言及されていないが、それは当然のこととして看過されたもので、彼の国家は奴隸制の上に立つ一種の寡頭制都市国家であつたに違ない。晩年の「法律編」ではあの「国家編」の哲人政治と国家共有財産制の理想はすてられていつそう実現可能な徳治主義の国家制度が説かれた。この「法律編」の實際的な面は後にローマ法の制定に寄与し、「国家編」の理想は形をかえてカトリック教会の位階制において実現された。

プラトンが若し日本に生まれていたら如何に日本を讚美し、生甲斐を感じたことかと思われる。神政政治と哲人政治と代議政治を一國の政治制に持ち、神、イデヤの世界をこの地上に実現せんとしている國である。いずれこのことは後述する。

農士道

菅原 兵治

第四章 農士論

一節 農道的立志

士の生活内容

前節に於て私は「士」の一般的消息を概説した。茲に改めてそれを要言すれば、士とは堅く志を立て、之に向つて意欲の馬猿に惹かるることなく、常に道義的生活を続ける者の謂である。然し具体的な實際問題になつて来ると、其人の立つる「志」の如何によつて、其の士的生活の内容を異にして来るものである。

花間の草を除く

伝習録に次の一節がある。

それは王陽明と其の門人の薛侃との問答である。

薛侃が或る日、花園の草を取りながら思はずつぷやいた。

「どうして天地間の事はすべてこのように善いものは培い難く、悪いものは去り難いものだらうなあ。」

之を聞いた王陽明が言った。

「いや、本来をいえば善いも悪いもないのだ。善とか悪とかいうことは、みな人間がきめるのだ。」

けれども薛侃には解らない。それで陽明は更に懇に教えた。

「天地の生意は花も草も一つだ。故に天より見れば善悪の区別はない。ただ、君が花を作ろうとするから、花を善として草を悪とするのであるが、若し草を用いようとすると人からいえば、却つて草を善とするであろう。だから善悪の区別は、人の欲する処によつて生ずるものだということが解るであろう。」

侃は聴いた。

「それでは先生、世の中には善悪の区別は無いのですか。」

「そうだ、天の立場から見れば無善無悪だ。或る一定の「志」を立つる人間の立場より見て、其処に始めて善悪が分れて来るのだ。」

「それでは、仏者のいう無善無悪と、一体何処が違うのですか。」

「佛者は無善無悪に執着して、一切を捨てようとする。だから天下国家の實際生活を治むることは出来ぬ。聖人の無善無悪は自分の小我的欲念から発する好悪の念によつて善悪を決めないということ、大きく天理に従つて一切を生長せしめて行こうとする意味からいふのである。」

「それでは——」

薛侃はせき込んで更に聴いた。

「それでは草を除くのは悪いことですか。」

そこで陽明は更に懇に説き聴かせた。

「いやいや、そういう考えは、佛者や老荘者流のいうことで、草が若し本当に邪魔になるものならば、君が之を除くことが何で悪かろう。」

「然し先生、草を除くということは、人間の好悪より発する小我的欲念ではありませんか。」

「いや、其処が大事な処である。好悪を作さぬということは、全く好悪せぬことではない。そんな者は無知覚の人というもので、好悪を作さぬというものではない。下略——」

かくて陽明は、真に正大なる理念より発する行為ならば、草を除くも亦天理であることを説き、最後に一問を發している。

「君の草を去らんとするは、是れ如何なる心ぞ。周茂叔が窓前の草を除かざるは、是れ如何なる心ぞ。」

と。周茂叔の窓前草不除とは、彼が若き日に天地の造化に参ぜんとして読書思索していた時、彼の友人が訪ねて来て見ると庭に草が茫茫と生えて足の踏みようもない有様である。

「どうしたのか、余りの荒れようではないか。」

という、彼は

「天地の生意花艸一般」

と答えたという。

天地の生意花艸一般。天より見れば——天は一切のものすべてを生長せしめようという無辺の大意なるが故に、花艸の間に善悪の区別が無い。恰度幾人かの子

供を有つ親が其の子の間に誰が死んで、誰が生きたがよいというような区別を立てぬ、ただすべての子供が、皆生長して呉ればよいと念ずる心のように……。

然し人間の立場になると「志」が立つ。人間は自己の「命」に従って、各々独自の「志」を立てる。随って花に志を立てた薛侃よりいえば、花を伸ばすことは善にして、草を伸ばすことは悪になる。かくて人間の世界は有善有悪の世界となり、随って善は之を為し、悪は之を去る必要が起つて来るのである。

(注)王陽明の四句訣には此間の消息を簡明に誨えている。左に録して参考としよう。

無善無悪心之体

有善有悪意之動

知善知悪是良知

為善去悪是格物

強いて之を言えば、「無善無悪心之体」は「命」の世界であり、有善有悪以下の三句は「志」の世界であるとなし得るであろうか。

「志」を何に立つるかによって、人生の消息は斯くの如く異つて来るものである。

来年の学問目標

三浦夏南

来年一年は崎門学を集中して学んで行きたいと考えている。これまでも崎門学については学んできたが、どちらかというとならぬ先生方の神道説や国体論についての関心が主であった。しかし今回は閻齋先生の神道説の側面、すなわち朱子学を主として学びを進めて行きたい。何故かと言えば、家族で農業に取り組む中で「倫理」の重要性に改めて気づかされたからである。ここで言う倫理とは現代言われているが如き一般的、社会的、抽象道徳ではなく、父子、夫婦、兄弟という家族関係に基づいた具体的道徳の事である。どれほど天下国家の事を憂い嘆いても、天下国家に処していく主体である「家」が確立していなければ、空言に過ぎなくなる。閻齋先生の神道説、国体論の背景には朱子学の道義に基づいて実践体認されてきた家族生活があることを忘れてはならない。閻齋先生は生涯を一貫して孝子であり続けた哲人である。現代には国体論を唱える者が不在でなく、神道説も閻齋先生の当時以上に詳細に考えられているが、家族の倫理を切実に考え、己の身に基づけて実践し、家を強固にするものは稀である。我々は閻齋先生の朱子学研鑽に立ち返って自らの身を正し、家を整えることを以て急務としなければならない。とりわけ我々が取り組むのは閻齋先生の高弟たちが残したシナの古典の講義録、「師説」と呼ばれているものである。これは出版されて活字になっているものが少ないので、図書館から写本を借りて読み解かなければならない。道のりは険しいが、崎門の先生方の解説は懇切丁寧を極めているので、四書五経を朱子学的に深く理解するには必要不可欠である。朱子学の良いところは、倫理を行っていく上での真理の解析が精細であり、心の用い方、工夫というものが詳しく教えられている。道義を踏み行うべきであることは分かっているが、私欲に阻まれて制し難いのが俗人の心である。朱子学を崎門に基づいて学ぶことによって、心の用い方の具体的なところが分かってくるのではないかと思う。これが習得できなければ、義理を遠くから眺め憧れることは出来ても、徳を身につけ、道を踏み行う君子にはなり得ない。まさに「君子己の為の学」であり、真の意味での「実学」である。

江戸時代の写本の解読には大変な労力がかかることが予想されるが、農業の合間に時間を確保しながら家族で協力し、道を明らかにすることは楽しいことである。長い道のりにはなるが、共に楽しみつつ学に励む一年にしたいと思う。

とよくも農園だより

三浦 美恵

師走に入り、とよくも農園にもようやく本格的な冬が訪れました。ここ最近朝晩は非常に冷え込み、農作業の効率も落ちてしまいます。そこで、夜は子供達とともに九時に就寝し、朝は大人四人早起きをして、各々が一人で勉強した後、主人が弟、義妹、私とマンツーマンでの十五分勉強会を行うのが日課となっています。内容は『靖献遺言』、『論語』、『小学』と様々ですが、朝の最も頭の冴えた時に名著に触れることで、単調になってしまいがちな農作業に活力を与えたり、自分自身の立ち振る舞いを振り返ったりする、非常に有意義な時間が過ごせています。その後子供達が起床してから、家族全員で神棚に参拝し、ご飯を食べ、身も心も温まった所でその日の農作業を始めます。

今日はネギ苗を定植した所にビニールトンネルを張っていく作業をしました。寒い中で植えたネギは、定植後しばらく経過してもほとんど育っておらず、このままでは冬に出荷できるネギが無くなってしまいます。そこで、インターネットで調べたビニールトンネルの張り方の動画を見ながら、注文していた資材を使って支柱を立て、杭を打ち、ビニールをかけていきました。長男もトンカチやロープを持ちながらお手伝いをします。慣れない作業で戸惑うこともありましたが、ほとんどのネギにビニールをかけ終わり、今はどの位トンネル内のネギが育



つか、また病気等にかかっていないかを観察しています。

さらに、今月は気持ちよくお正月が迎えられるよう、畑の片づけや庭の手入れに力を入れました。マルチをはがしたり、庭の剪定をして行くことで、心も清められます。

また、今月特筆すべき三浦家が変わったことが二つあります。まず、主人と義弟は朝晩二回の参拝前に袴を着用し、服装を整えてから参拝をするようになりました。参拝の時間がより厳肅なものとなり、普段は賑やかな子供達も、その時間だけは真剣に手を合わせています。農作業も少しずつ「和」を意識したものに変わっています。二つ目は食事についてです。今まではお肉がメインの一品物やパスタが多く、家族バラバラに食べることもあった三浦家ですが、今月からは肉を廃し、ご飯、味噌汁、漬物、納豆、魚といった和食を家族全員が揃ってから頂くようになりました。ご飯が以前より楽しい時間となり、賑やかな家族団らんの時間はあつという間に過ぎてゆきます。

「豊」の一字を今年の家族目標に掲げていた三浦家ですが、今年一年間家族で農業に勤しみ、家族で様々なことを話しあい、心が「豊」かになった一年でした。来年は主人も書いていた通り、家族で論語の研究に励み、心を「養」う一年にしてゆけたらと思っています。また、来年二月には義弟の二人目の子供も出産予定で、ますます賑やかな令和四年となりそうです。来年もどうぞよろしくお願いいたします。



★今後の予定

先月に引き続き個別での勉強会の対応をさせて頂いています。ご希望の方は事務局までお電話ください。

★一燈照偶 万燈照園

ひの心を継ぐ会は竹葉秀雄・近藤美佐子両先生の精神を継承し、発展させることを目的として生まれた会です。一人の「ひ」の精神が周囲の人々の心に「ひ」を燈し、やがてそれが国を照らす「ひ」になることを願い、活動を行っております。皆様には何卒ご理解とご支援を賜りますよう、宜しくお願ひ申し上げます。

★年会費

一般会員	三千元
賛助会員	一万円
特別賛助会員	三万円
支援会員	一万円